

ささ ばる
笹原古墳

大野城市教育委員会



石 室

太宰府インターチェンジのすぐ北側にあった円墳で、直径が約30m、高さ3～4mの大きさでした。石室は^{なてあなしきせきしつ}竪穴式石室でしたが、^{とうくつ}盗掘のため、^{ふくそうひん}副葬品は大部分がなくなっていました。

古墳の盛土した部分を墳丘と言いますが、ここには^{もりつち}こぶし大の石をたくさん貼りつけて^{ふんきゅう}葺石としていました。また、一部には^{しゅうこう}周溝もありました。壺の形をした^{つぼ}埴輪の破片があったので、最初は^{はにわ}回りに立て並べていた^{おさ}ものでしょう。この近くを^{おさ}治めた豪族の墓とされます。



葺石



周溝

葺石

墳丘の盛土が崩れないように全面に石を敷き並べる場合があって、それを葺石と呼んでいます。比較的大きな古墳とか、古墳時代（4～7世紀）でも古い方の古墳によく見られます。笹原古墳の場合はこぶし大ぐらいの石が使われていました。上の方の部分はだいぶ崩れていました。

周溝

大阪や奈良の天皇陵と言われる大きな前方後円墳の周囲には水をたたえた周溝が見られます。笹原古墳にも東南側の一部に周溝がありました。幅が3.5～4.5m、深さ40cm程度の大きさです。この場合、水を入れても流れ出てしまうので、古墳の区域をはっきりさせるためのものと言えます。

出土品

石室からは鉄の甲・冑の破片、鉄製の剣、

刀子（小刀）、鏃の破片、墳丘からは壺形の埴輪の破片が見つかりました。甲・冑は主に三角形の鉄板に小さな穴をあけて革でとじ合わせたものです。ほとんどが小さな破片となっていました。復元するとそれぞれ下のような形になります。このような出土品と石室の形から考えて、笹原古墳は5世紀の前半に造られたことがわかります。

